

ごん吉くんレポート ～南吉よもやま話～

第52回

児童雑誌『カシコイ 小学生』と新美南吉①

写真は、東京神田神保町にあった精文館が刊行していた児童雑誌です。『カシコイ一年小学生』と『カシコイ二年小学生』があり、教科書の内容に合わせて書き取りや算術、修身など教育的な内容とともに、童話や童謡、漫画も多く掲載されていました。刊行期間は昭和7年末から10年頃。新美南吉が東京外国語学校に通っていた時期と重なります。学生だった南吉の作品を掲載してくれた雑誌です。

昭和7年4月、東京外語に入學した当初、南吉にとって主な作品発表の場は、上京前から童話や童謡を投稿していた雑誌『赤い鳥』と同人として寄稿していた童謡同人誌『チチノキ』でした。

しかし『赤い鳥』は、南吉の師で同誌の投稿童謡欄の選者をしてきた北原白秋が主宰者鈴木三重吉と訣別してしまったため、童謡『光』（昭和8年4月号）を最後に投稿を辞めざるを得ず、『チチノキ』も休刊状態にありました。そうした中、南吉の作品を載せてくれたのが『カシコイ小学生』でした。現在掲載が分かっている作品は「あめだま」「げたにばける（下駄にばけた小狸）」「こど

ものすきなかみさま（小さい神さま）」（カッコ内は掲載時のタイトル）など幼年童話6編です。プロの画家によるカラーの挿絵がつけられ、同誌顧問として童話や童謡を発表していた浜田広介や北原白秋らと扱いは変わりますが、日記には精文館の編集者からも書かれており、作家志望の青年南吉の自尊心を充たすのに十分な待遇だったといえるでしょう。異聖歌、與田準一など同じ白秋門下の先輩たちの作品も同様に掲載されていて白秋が彼らを推薦したとも考えられます。

「金がほしいので精文館へやる短い童話を書いた。」（5月8日）
「（異）聖歌は、精文館の童話をもうと書けと云った。」（7月9日）
「当って砕けると思って、精文館へ童話を持って行った。」（12月21日）

昭和8年の南吉の日記からは『カシコイ小学生』のため積極的に童話を書いていた様子が見えられます。昭和10年5月には、精文館の編集者が異聖歌に持ち掛けた幼年童話集の出版話を聖歌が南吉に譲り、そのために南吉は短期間で書き下ろしを

含め20編以上の原稿を揃えましたが、彼が無名であることを理由に出版を断られたということもありました。しかし今のこつている南吉の幼年童話の半数以上は『カシコイ小学生』と精文館との関わりで書かれたもの。東京時代の彼の創作活動を語る上で、雑誌、出版社ともに大切な存在であることは間違いありません。

*

新美南吉記念館では、9月19日（土）から企画展「児童雑誌『カシコイ小学生』に集った作家と新美南吉」を開催します。

※次回「ごん吉くんレポート」では同誌に集った作家についてご紹介いたします。

新美南吉記念館 小栗真子



右・『カシコイ二年小学生』昭和9年11月号

表紙／画 藤澤龍雄

左・同誌に掲載された「下駄にばけた小狸」／

画 田原利一

みなさんの（声）を聞かせてください アンケート

Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。

Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。

Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666

東洋町2-1

企画課

Eメール

kouhou@city.handa.lg.jp



「いつもありがと」「ずっと元気でいてね」など、敬老の日は普段は照れくさくて伝えられない思いを伝えるチャンスです。私も、新しい生活様式の範囲内で、日頃の感謝を伝えたいです。

（浅野）

編集後記

今日は9月21日が、敬老の日です。敬老の日は、1947年に兵庫県多可郡野間谷村（現在の多可町）で「お年寄りを大切にし、お年寄りの知恵を生かした村作りをしよう」という考えのもと「としよりの日」が提唱されたのが始まりだそうです。